

漱石漢詩研究

——「修善寺の大患」直後の漢詩について——

林 蕙 美

一、「修善寺の大患」とは

漱石は長年胃の不調に悩まされていた。それが胃潰瘍と判明し、明治四十三年六月十八日には治療のため長与胃腸病院に入院した。七月三十一日に一旦退院し、八月六日に医者のお勧めで療養のため、修善寺に赴いた。しかし病状が予想外に悪化し、八月二十四日、五百グラムの大吐血をして危篤に陥った。三十分間の仮死状態を経て、医者のお懸命の処置によりようやく命を取りとめた漱石は、十月十一日東京に戻り、長与胃腸病院に再入院した。この一連の出来事、いわゆる「修善寺の大患」は漱石自身によって、当時の日記にも記されており、また「朝日新聞」に連載した随筆の『思ひ出す事など』（明治四十三年十月二十九日から四十四年四月十三日まで）の中にも詳細に書かれている。漱石にとって、この生死をさまよう体験は重大な意味をもつもので、後の漱石文学にも深い影響を与えたことは周知の通りである。

「修善寺の大患」以後に漱石は漢詩の創作を再開する。漢詩の創作はすでに十代の頃から始まっていた。松山、熊本時代（明治二十八年から三十三年までの間）にも、数量的には多くないが、正岡子規や本田種竹、長尾雨山らとの交友の中で作り続けていた。しかし明治三十三年九月のイギリス留学をきっかけに、詩作することを絶っており、また帰国してからも、『草枕』の中にかつて作った漢詩（「春興」と「春日静坐」）が引用されたほか、全く漢詩とは無縁の日々が続いていた。ところが、この病床体験で、十年ぶりに詩作への意欲が蘇って来ているのである。

明治四十三年七月三十一日の日記には、「十年來詩を作った事は殆んどない。自分でも奇な感じがした。扇へ書いた。／今日退院。」というように漱石は十年ぶりに詩を作ったことを不思議に感じたと言っている。

來宿山中寺 來たり宿る 山中の寺

更加老衲衣 更に加う 老衲の衣

寂然禪夢底 寂然たる禪夢の底

窓外白雲歸 窓外 白雲歸る（読み下しは一九九五年岩波

版『漱石全集』第十八巻による、以下同）

この詩は森圓月に頼まれて書いたものだと日記にも記されているが、一ヶ月半にも及ぶ入院生活を終えようとして、退院する日に書かれたものである。この詩からは入院によって雑然たる日常から一步離れて、外（自然）の世界に目が向かおうとする姿勢、及びその心情の変化が窺われる。

この時期、つまり「修善寺の大患」直後に書かれた漢詩は、数としては決して多くない。しかし、全十七首と数えられる漢詩は日記に記されたのち、先ほどの一首を除くすべてが『思ひ出す事など』の中に採られている。発表を目的として作られたものではない漱石漢詩の中で、この時期の漢詩は珍しいものとも言えよう。それは漱石の意図で公表した形となったことから極めて完成度が高いものと見られる。また丁寧な添削した痕跡も日記の中に残っている。

二、漢詩を書かざるをえない内面的な必然性

漢詩の創作について、漱石は『思ひ出す事など』の中で次のように述べている。

余の如き平仄もよく辨へず、韻脚もうろ覚えにしか覚えてゐないものが何を苦しんで、支那人に丈しか利目のない工夫

を敢てしたかと云ふと、実は自分にも分らない。けれども

（平仄韻字は省略して）、詩の趣は王朝以後の伝習で久しく日本化されて今日に至つたものだから、吾々位の年輩の日本人の頭からは、容易にこれを奪ひ去る事が出来ない。余は平生事に追はれて簡易な俳句すら作らない。詩となると億劫で猶手を下さない。たゞ斯様に現実界を遠くに見て、杳な心に些の蟠りのないとき丈、句も自然と湧き、詩も興に乗じて種々な形のもとに浮んでくる。さうして後から顧みると、夫が自分の生涯の中で一番幸福な時期なのである。風流を盛るべき器が、無作法な十七字と、佶屈な漢字以外に日本で発明されたらいざ知らず、左もなければ、余は斯かる時、斯かる場合に臨んで、何時でも其無作法と其佶屈とを忍んで、風流を這裏に楽しんで悔いざるものである。さうして日本に他の恰好な詩形のないのを憾みとは決して思はないものである。（第五章）

「健康の時にはとても望めない長閑かな春が其間から湧いて出る」（同）と、病中でこそ得ることができた余裕が自然に詩となり、漱石はこれを風流と認めると同時に、楽しんでいふ。もっとも漱石が若い頃から深く身についた漢文の教養も無視してはならない。その教養があつてこそ、こうして漢詩を書き続けたことができたのであろう。

修善寺での漱石は一時瀕死状態に陥つたため、回復に向かい

つあるとは言え、重病の後でその体はきわめて弱っていた。自力で体を動かすことすらできないほど肉体は衰弱しているが、しかしその反面、精神状態―頭脳の働き―は明治四十三年九月二十日の日記にも「昨日より病前に読みかけた六づかしい本を寐ながら少々讀むに頭の工合は病前と差して異ならず。」とあるごとく、病前とは少しも変わらない状態であったという。むしろ病氣と向き合ってから、周りのことをより鋭く、敏感に感受するようになったと言ってもいいだろう。そんな中、この時期俳句と共に、いや俳句以上に漢詩に打ち込んだ理由は何であったのか。恐らくこの事情は漢詩自体が語っているはずである。この日（九月二十日）の日記には「夜来の雨。しばく眼覚む。」と書かれた後、

大風鳴萬木 大風 萬木を鳴らし

山雨撼高樓 山雨 高樓を撼がす

病骨稜如劍 病骨 稜として劍の如く

一燈青欲愁 一燈 青くして愁えんと欲す

と漢詩一首を記している。事実、目が覚めるほどの雨や風で起こされたのか、それとも尖った神経がどんなにささやかな音にも反応してしまうのか、もしくは体の痛みで目が覚めてしまうのか。ともかく安らかな睡眠が妨げられ、病氣でやつれきった体が惨めに自らの目に映っている。そうして、暗い明かりがまさに自分の心象を表わしている如くに思われるという。『思ひ出す事など』第二十二章で漱石は、吐血後に命を取りとめたが、体のいたると

ころに感じた強い痛みを忍びつつ、朝が来るのを待ちわびたと、当時の様子を振り返って詳細に述べている。そして「大風」を「秋風」に改め、この漢詩で一章をまとめたのである。痛みを感じるごとこそ、生きていくことのないよりの喜びを示す証拠であると同時に、その痛みにより人は一人で耐えていかなければならぬという生の孤独も知らされるのではないか。

『思ひ出す事など』第八章には大吐血直前、病氣に苦しんでいる様子が描かれている。結びのところに「此煩悶に比べると、忘るべからざる二十四日の出来事以後に生きた余は、如何に安住の地を得て静穩に生を営んだか分らない。其静穩の日が即ち余の一生涯にあつて最も恐るべき危険の日であつたのだと云ふ事を後から知つた時、余は下の様な詩を作つた。」と書かれ、次の七言絶句が載せられている。

圓覺曾參棒喝禪 圓覺 曾て參ず 棒喝の禪

瞎兒何處觸機縁 瞎兒 何れの處か 機縁に觸れし

青山不拒庸人骨 青山 拒まず 庸人の骨

回首九原月在天 首を九原に回らせば 月 天に在り

まず首句は言うまでもなく、明治二十七年漱石の鎌倉円覚寺での参禅体験が詠まれている。そして入院する前に書かれた『門』の中にも、宗助の参禅が描かれているが、実際の経験でも、虚構の作品の中でも、どちらも悟ることができずに参禅は失敗に終わっている。つまり求めようとする宗教への道が絶たれてしまったの

である。その上、一切の煩惱を棄てて、死に向かうことも簡単には許されなかった。一海知義氏訳注に「月天に在り」はすなわち「再生の象徴的風景」^(注1)であるにとられてるように、漱石は実際に生死の境をさ迷う揚句、「九原に死の世界」から生き返ったのである。しかし、これは〈再生〉したとは言え、決して生き延びたことの喜びを称えようとするものではなく、むしろ生死の没交渉に戸惑いながら運命の不条理を嘆いているものと解釈するほうがよいであろう。

この時期の漢詩の中で、最も印象的なのは恐らくあの大吐血の模様を詠じる詩であろう。

淋漓絳血腹中文 淋漓たる絳血 腹中の文

嘔照黄昏濛綺紋 嘔いて黄昏を照らして 綺紋を濛わす

入夜空疑身是骨 夜に入りて空しく疑う 身は是れ骨かと

臥牀如石夢寒雲 臥牀 石の如く 寒雲を夢む

十月五日の日記に記したのちに『思ひ出す事など』の第十三章の結びに綴られたものである。日記での「入夜通身渾是骨(夜に入りて通身渾て是れ骨なるを)」、痛々しい実状、すなわち肉がなくて、骨が痛むそのありさまを和らげるように、「入夜空疑身是骨(夜に入りて空しく疑う身は是れ骨かと)」、むなしく、定めではない風にと改稿されたと思われる。これによって虚幻の感を強調し、尾句の「臥牀如石夢寒雲(臥牀石の如く寒雲を夢む)」と、より一層呼応するであろう。大岡信氏はこの詩が「ほとんど何の

きらびやかな詩的修飾もない。言々句々、ただ出来事の正確な叙述から成っているのみだ。にもかかわらず、この七言絶句の印象は強烈である。^(注2)と述べているように、漱石は大吐血当時の様子をリアリスティックに再現しているのである。前半の二句において、「黄昏」の時分におきた吐血の模様が描かれ、また後半の二句では場面や時間が一転して、「夜」の病床にいた自分は体の痛みで目が覚めてしまい、悪夢でも見ているのかと疑う。「黄昏」の吐血から「夜」の病床にかわったこの間の時間は不明瞭である。このようにわざと二つの不連続の出来事を並べたのは、恰も記憶に存在しない、危篤に陥った三十分のことを物語っているかのようである。二十八文字で正確に『思ひ出す事など』の第十三章をまとめたのである。

もう一首吐血にふれている五言絶句がある。十月七日の日記、『思ひ出す事など』第二十五章の終わりに記されている。

傷心秋已到 傷心 秋已に到り

嘔血骨猶存 嘔血 骨猶お存す

病起期何日 病起 期するは 何れの日ぞ

夕陽還一村 夕陽 還た一村

病状が悪化し、「嘔血骨猶お存す」と詠じたように、どうにか一命を取りとめたこの傷心の秋の出来事が突如として起こって、病気が治るのはいったいいつの日かと思ひ、外を見ると夕日もまた射し出でているのではないか。ここで一年の終わりに近い〈秋〉

と一日の終わりに近い〈夕陽〉とはあい照応して、その限りない寂しさを伝えるかと思われる。

ここまで取り上げた漢詩の中で「骨」という語の重出が非常に目立っている。事実、病気による瘦せきった体の描写とも取れるが、むしろ漱石の目には、それは「忘るべからざる二十四日の出来事」が残した一つの証として映っていると思われる。

やがて帰京の時は近づき、十月十日の日記には、「愈明日東京へ帰れると思ふと嬉しい」と記した後、次の詩を詠ずる。『思ひ出す事など』第二十八章の終末に置かれた漢詩である。

客夢回時一鳥鳴 客夢回る時 一鳥鳴き

夜來山雨曉來晴 夜來の山雨 曉來晴る

孤峯頂上孤松色 孤峯の頂上 孤松の色

早映紅暎鬱鬱明 早に紅暎に映じて 鬱鬱として明らかなり

吉川幸次郎氏は「この詩、この鬱鬱という疊字のほか、夜來、曉來と、來の字を重ね、孤峯、孤松と、孤の字を重ねる。これらは、同一の字を二度使ってはいけないという近体詩の通例の禁忌の外にあるもので、ことに喜悦の詩には、こうした句法が、杜甫の『三月已に破れて三月來たる』をはじめ、しばしばある」と句法を分析して、「喜悦の詩」と分類している。確かに十月七日の漢詩に潜める寂然たる風景が一転して、中村宏氏が指摘しているように「全体に軽く明るい調子」に変わっていることが明らかで

ある。夢から覚めると鳥の鳴き声が聞こえてくる、明けがたになると、昨夜から降っていた雨もあがって、さわやかな朝がわたしを待ち受けている。寂しく見えた、ただ一つそびえ立つ峰の頂上にある一本松も朝日を浴びて美しく姿を見せている。ここでは〈自然〉をただ客観的に観照するのではなく、心的状態を反映する〈自然〉が捕らえられているのである。

三、認識者の目

十月十一日、二ヶ月ぶりに東京へ帰って来た漱石は、長与胃腸病院の入院中も漢詩を書いていた。最も注目すべきものと言えば、四たびの改訂を加えて完成した次の漢詩であろう。それぞれ十月十六日、十七日、十八日の日記に推敲の痕跡が残っている。まず十月十六日の日記には次のように記している。

天地有無裏 天地有無の裏

死生交謝時 死生交ごも謝する時

人間失寄託 人間寄託を失う

如踞一藕絲 一藕絲に踞するが如し

命根何處來 命根何れの處より來たる

靈台不可知 靈台知る可からず

窈窕日月遐 窈窕として日月遐かに

岌岌萬象危 岌岌として萬象危し

幽明忽咫尺 幽明忽ちにして咫尺

乾坤半餉移 乾坤半餉にして移る

單軀跨双界 單軀双界を跨ぎ

隻眼挂大疑 隻眼大疑を挂く

幸生天子國 幸いに天子の國に生まるるも

未逢當代師 未だ當代の師に逢わず

四十猶兀兀 四十にして猶お兀兀

斯道果屬誰 斯の道果たして誰にか屬さん

全く記憶にない三十分の死を妻から聞かされた漱石がその心のゆれ——「死とはいったいなにか」を伝えようとした漢詩である。死に襲われて抛り所がなく、あたかも「一本の藕絲に踞するが如し」と記しているように、いつその生命をつなぐ糸が切れてもおかしくない状態のもと、「命根何れの處より來たる」かと自問せざるを得ない。しかしこの人間存在への問いかけは、ついその真相をつかむことはできない。『思ひ出す事など』の第十五章に「俄然として死し、俄然として吾に還るものは、否、吾に還つたのだと、人から云ひ聞かさるゝものは、ただ寒くなる許である。」という作家の醒めた目に対して、詩人の目は不明瞭な生から死へと変わる瞬間に困惑し、特に最後の二聯からはその焦燥の感がよく伝わってくる。この十六日の詩は天地の句から靈台の句までと窈窕の句から最後までと二連に分けることができる。それが十月十七日の日記では、

縹渺天地外 縹渺天地の外

生死交謝時

杳然無寄託

懸命一藕絲

命根何處在

窈窕不可知

唯覺天日暗

翻怪人間奇

幽明固比隣

乾坤一瞬移

單軀入双界

隻眼挂大疑

休言閱兩極

曷得窮兩儀

生住天子國

未許稱人師

四十徒兀兀

斯道竟屬誰

孤愁澹難語

况逢蕭颯悲

仰臥秋已闌

一病欲銀髭

寥廓天空在

生死交ごも謝する時

杳然として寄託無し

命を一藕絲に懸く

命根何れの處に在る

窈窕として知る可からず

唯だ覺ゆ天日の暗きを

翻って怪しむ人間の奇

幽明固より比隣

乾坤一瞬にして移る

單軀双界に入り

隻眼大疑を挂く

言うを休めよ兩極を閱すと

曷ぞ得ん兩儀を窮むるを

生まれて天子の國に住むも

未だ人の師と稱するを許さず

四十徒らに兀兀

斯の道竟に誰にか屬さん

孤愁澹として語り難く

況んや蕭颯の悲しみに逢うをや

仰臥秋已に闌にして

一病銀髭ならんと欲す

寥廓として天空在り

黙見／看高果枝 黙して見／看る果枝高きを

朝食前に昨日の詩を改めてこんなものにした。実際の詩である。詩のための詩ではない。だから存して置く。

とあるように、縹渺の句から窈窕の句まで、唯覺の句から未許の句まで、四十の句から最後まで、の三連、二十四句の構成となつたのである。つまり第三連が新たに加えられたことになる。第一連で、まず仮死状態に陥つた体験から引き出される生死の虚幻の感を表白し、「命根何れの處に在る」かと、人間存在への根源的な問題が問い掛けられる。第二連では、「幽明」「乾坤」「双界」「兩極」「兩儀」で表わす相対立の両面、つまり生と死との境界線の不明瞭さに戸惑いを覚え、心の動揺が隠せない。言葉遣いにおいてはいままでにない痛烈な表現が散りばめられる。また第三連は現在の臥床している自分を見つめてその空しく、悲しい感懐を詠じている。日記の中で漱石がいう「詩のための詩ではない」、「実際の詩」とは、大岡信氏が言っている「詩美への配慮よりは、むしろ精神の動揺の原因・結果を正確に定着しようとする心の動きの方が強く感じられる詩^(注5)」であろう。生死の境をさ迷つた後、生き延びた人にしかわからないその生命のはかなさを詠じる詩であると同時に、そこには鋭い目で生の実相ともいうべきものを見詰め、自分を再認識しようとする姿勢が窺えよう。十八日の日記ではさらに推敲を加えて、第二連にあたるところに削除のしるしをつけ、次の十四句の形で、『思ひ出す事など』に取り入れ、定

稿として発表したのである。

縹渺玄黄外 縹渺たる玄黄の外

死生交謝時 死生 交ごも謝する時

寄託冥然去 寄託 冥然として去り

我心何所之 我心 何の之く所ぞ

歸來覓命根 歸來 命根を覓むるも

杳窈竟難知 杳窈として 竟に知り難し

孤愁空遶夢 孤愁 空しく夢を遶り

宛動蕭瑟瑟 宛として蕭瑟瑟の悲しみを動かす

江山秋已老 江山 秋已に老い

粥藥鬢將衰 粥藥 鬢將に衰えんとす

廓寥天尚在 廓寥として 天尚お在り

高樹獨餘枝 高樹 獨り枝を餘す

晚懷如此澹 晚懷 此くの如く澹に

風露入詩遲 風露 詩に入ること遅し

縹渺たる、遙かにおぼろな天と地の外、死と生が入れ替わろうとした時、頼りとするものが闇の中に消えてゆく。我が心は一体どこへ行こうとするのか。第五句は十月十六日「命根何處來（命根何れの處より來たる）」から十七日「命根何處在（命根何れの處に在る）」、十八日「命根何處是（命根何れの處か是れなる）」に変わって、定稿では「歸來覓命根（歸來命根を覓むるも）」となっている。「歸來」とは俄然として死が襲い掛かって、俄然として

生に戻ってきたことで、命根——根本的な人間存在の問題——を
探し求めようとしたけれども、はるかでおぼつかない、とうとう
それを知ることができなかったという。しかし、この〈命根を覓
む〉の一語にこもる作家としての決意のひびきは深い。また敢え
て、未定稿に見える激越な表現を削ることによって、より含蓄あ
る形になったと言えよう。この改稿に関して、吉川幸次郎氏は
「定稿ではけずった数聯にくだくだしくのべた思想を、空しく夢
を遶る、空遶夢、の三字に凝集したと見られる」^(注6)といっている。

確かに表現が違っても表わしている内容には重複する部分が多すぎるため、より凝集された形にしようとする意図が窺われるが、〈発表〉という形を考えるとこのような激しい心情表現は日記の中に止めておいた方が良くと漱石は判断したのであろう。

臥床をしていると、孤独の哀愁に満ちてむなしく夢に纏われ、悲しい限りである。季節の秋が深まって、「粥薬髯將衰（粥薬髯將に衰えんとす）」というごとく、病氣をして鬢白くなっている自分を見て、やはりわが人生にも秋が訪れてきたと実感した。天が依然として広々と、さみしく存在するのに対し、「高樹獨餘枝（高樹獨り枝を餘す）」とある通り、自分は痛ましい骨だけになっ
てしまった。自分が置かれた外部の世界と内面の世界を観照しつつ、これからもこのように世俗とは没干渉で、自然を楽しみながら詩を詠じ、静かで安らかに晩節を送りたい。この一首の漢詩で仮死状態に陥った経験や、この異常な経験から人間存在の問題に

直面し、感じ入る思いや、病中の心境、またこれから歩こうとする道が漢詩的表現とは言いながら、周密に語られている。

漱石の漢詩は大岡信氏が「悟達した人のごく自然に沸きあがる詩心の流露といった性質のものではな」く、「内省し続ける意識家が、おのれの経てきた歳月を顧み、また現在を眺めながら、たえず新たな自己確認をこころみている」^(注7)と指摘するように、認識者としての意識が強く働いてゆく、そのさなかから掘み出されたものである。随筆『思ひ出す事など』における散文表現と同様に、いや、場合によってはそれ以上に、漱石の病氣の状況や、病床における心境の微妙な変化を詩人の内省的な目を通して表わしたとも言えよう。

四、『明暗』期へ

漱石は『思ひ出す事など』第四章で『思ひ出す事など』は忘れるから思ひ出すのである。漸く生き残って東京に帰った余は、病に因つて纒かに享け得た此長閑な心持を早くも失はんとしつつある。まだ床を離れる程に足腰が利かないうちに、三山君に遺つた詩が、既に此太平の趣をうたふべき最後の作ではなからうかと自分ながら掛念してゐる位である。『思ひ出す事など』は平凡で低調な個人の病中に於ける述懐と叙事に過ぎないが、中には此陳腐ながら払底な趣が、珍らしく大分這入つて来る積であるから、余は早く思ひ出して、早く書いて、さうして今の新しい人々と

今の苦しい人々と共に、此古い香を懐かしみたいと思ふ。」と述べている。「修善寺の大患」は漱石にとつて、身体的な苦い経験であったと同時に、漢詩を始め、忘れ去ったいろんな趣が蘇ってくるきっかけでもあった。しかしその漢詩の重要さにその時の漱石はまだ十分に気づいていなかったはずだが、『朝日新聞』主筆池邊三山に次の七言律詩を送っているのはいかにも暗示的である。

遺却新詩無處尋 新詩を遺却して 處として尋ぬる無く

嗒然隔牖對遙林 嗒然 牖を隔てて 遙林に對す

斜陽滿徑照僧遠 斜陽 徑に滿ちて 僧を照らすこと遠く

黃葉一村藏寺深 黃葉の一村 寺を藏すること深し

懸偈壁間焚佛意 偈を壁間に懸くるは 佛を焚くの意

見雲天上抱琴心 雲を天上に見るは 琴を抱くの心

人間至樂江湖老 人間の至樂 江湖に老い

犬吠鷄鳴共好音 犬吠 鷄鳴 共に好音

この詩を送った経緯については同じく『思ひ出す事など』の中に、詳細に書いてある。また「巧拙は論外として、病院に居る余が窓から寺を望む訳もなし、又室内に琴を置く必要もないから、此詩は全くの実況に反してゐるには違ないが、たゞ当時の余の心持を詠じたものとしては頗る恰好である。(中略)人間は閑適の境界に立たなくては不幸だと思ふので、其閑適を少時なりとも貪り得る今の身の嬉しさが、此五十六字に形を変じたのである。」と語っている。七言律詩のスタイルといい、読まれた内容といい、

『明暗』期の漢詩につながるところが多い。しかし『明暗』期の漢詩の執筆に至るまでには、さらに五年の年月がかかったのである。

(注1) 岩波版『漱石全集』第十八卷、平成七年十月

(注2) 「漱石における詩歌——主に漢詩の世界につき——」『国文学』昭和四十五年四月号

(注3) 『漱石詩注』岩波書店、明治四十二年五月

(注4) 『漱石漢詩の世界』第一書房、昭和五十八年九月

(注5) 同注2

(注6) 同注3

(注7) 同注2